

聖衆から幽霊へ—闇から現れるものたち

佐藤弘夫（東北大学）

【要旨】

大方の現代人にとって、闇は得体の知れない存在が潜む忌避すべき空間である。怪談やホラー映画の舞台も、大半は夜だった。しかし、時代を中世まで遡ったとき、闇は単なる恐怖の対象ではなく、聖なる存在が出現する場として認識されていた。

近・現代人が、夜の闇に聖なる存在の化現を期待することはもはやない。そこに現れるヴィジョンは、幽霊や妖怪のような不気味なものたちだけである。

なぜ、このような転換が生じたのであろうか。中世から近・現代に至る過程で、この列島の精神世界にいったい何が起こったのであろうか。

今回の発表では、目に見えぬ存在が出現する領域と信じられた闇認識の変化に焦点を合わせて、日本列島において中世から近世にかけての時期に生じた世界観の転換を考えるとともに、その変動を、列島を超えたコンテクストに位置付けることを試みたい。

【目次】

1 闇の奥にひそむもの

現代 闇は恐怖の対象

近世 闇は魑魅魍魎と幽霊の世界

しかし、中世に遡ると異なる様相—闇から出現する聖なる存在「聖衆来迎」

中世と近世以降の時代を隔てるものはなにか

コスモロジーの転換という視座から考える

2 異界としての中世社会

現代と中世との相違 見えない世界に対するリアリティの共有の有無

中世—現実世界の背後に根源的な真理の世界（浄土）の实在

人生の究極の目的—その世界への到達

理想の人生の終焉—彼岸からの来迎、その前提としての他界からのメッセージ

3 浄土の扉の開くとき

他界との回路を開く作法の存在—時間（暁）と場所（霊場）

浄土の扉が開いた証拠→浄土を満たしていた「微妙」の音楽

寺社参籠の流行

作法に則った神仏のメッセージはいかに奇異にみえても真実

→「偽書」の大量発生へ

作法に基づかない来迎—邪悪な存在の化現

中世に存在した2種類の闇 百鬼夜行と聖衆来迎の舞台

4 枯渇する聖なる水源

14～16 世紀 不可視の他界のリアリティの喪失

閉じられた彼岸世界への回路

彼岸に旅たない死者 墓場に留まる亡者たち

暗黒—邪悪なる存在の潜む場所へ

闇から現れる幽霊

近代—闇は聖なるものの訪れを待つ世界ではなく、光によって消滅させるべき対象

聖性と恐怖

【発表関連文献】

佐藤弘夫『偽書の精神史』講談社選書メチエ、2002

同 『死者のゆくえ』岩田書院、2008

同 「彼岸に通う音—神仏の声がノイズになる時」『文学』11 卷 6 号、岩波書店、2010

同 「彼岸に誘う神—浄土信仰におけるイメージとヴィジョン」『死生学研究』16 号、
東京大学大学院人文社会系研究科、2011